The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮地嘉六『煤煙の臭ひ』 : 丸田の放浪について
Author(s)	藤村, 杏美
Citation	阪大近代文学研究. 2017, 14-15, p. 14-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宮地嘉六『煤煙の臭ひ』
――丸田の放浪について――

藤村 杏美

一、問題の所在

宮地嘉六（明治一七年――昭和三三年）は現在では殆ど顧みられることのない作家である。大正中期から昭和にかけて活躍したが、マルクス主義的プロレタリア文学の台頭とともに急速に忘れられていった労働文学の作家の一人だ。

宮地は佐賀県の生まれであるが、義母と折り合いが合わず一三歳で出奔。佐世保や呉の海軍工廠を転々としながら職工として働いた。労働のかたわら小説を書き、堺利彦の世話(1)で雑誌『中外』に掲載した『煤煙の臭ひ』（大正七年九月）が文壇の注目を得る。折しもその時期は労働問題に対する関心が高まっていた時期であり、宮地は〈労働者の肉声〉を紡ぐ初めての作家として期待されたのだった。このことは大正八年一〇月に発売された単行本『煤煙の臭ひ』の広告文に、「労働文学の先声は始めて此一巻に鳴り響けり」(2)とあることからも窺える。

だが宮地らの労働文学は、後に隆盛を極めるマルクス主義的プロレタリア文学の作家達からは認められなかった。ナップが昭和五年のハリコフ会議(3)に提出した「日本プロレタリア文学についての報告―その沿革、現勢、および将来」(4)は、労働文学を以下のように位置づける。

> しかしこの当時の『労働文学』は未だ、単に労働者の生活に取材したと言うだけの自然主義的『貧乏』小説であるか、人道主義的同情小説であるか、無政府的『反抗気分』小説であるかに過ぎず、マルクス主義によるプロレタリアートの階級的観点に立脚したものからは遠いものであった。

このようにプロレタリア文学から疎外された労働文学の作家達の多くは、労働文学から距離を置いてしまう。宮地もまた例外ではなく、自身の結婚生活などを書く私小説作家へと

転身するが、晩年に出版した『老残』（昭和三〇年一〇月）がわずかに評価された程度でそのまま忘れられた作家として埋もれていった。

ただ、小田切秀雄が労働文学を「貴重な文学遺産の一群として評価するにたえるものであり、従来のような不当な評価は訂正してゆかなければならぬ」(5)と述べているとおり、昭和中期には労働文学再評価の萌しも見えた。宮地嘉六に関しても森本修によって詳しい年譜(6)が編纂されたり、森山重雄「宮地嘉六論」(7)のように宮地の作品を総体的に見直す研究が進められたりもした。

だが、これらの研究は作家研究に留まっており、宮地の個々の作品の研究は現在に至るまで十分には行われていない。宮地嘉六という作家の再評価を試みるのであれば、当然彼の作品が一つのテキストとしていかに読めるのか論じていく必要性があるだろう。

そこで本論では宮地の出世作であり、文学史の上でも彼の代表作として位置づけられている『煤煙の臭ひ』（『中外』大正七年九月）を特に取り上げて読解を行いたい。『煤煙の臭ひ』は明治末期の呉(8)と思われる「小都会」を舞台に、造船所で働く労働者たちの生活を描いている。労働者の丸田が人妻（お小夜）に恋慕して破れるまでが話の中心であり、丸田の周囲には社会主義思想に関心をもつ労働者（嘉吉）や、成り上がり者の資本家（お小夜と嘉吉の義兄）などが登場する。

主要登場人物が労働者であることや、舞台である街が宮地と縁深い呉であることから、従来『煤煙の臭ひ』は宮地の実体験として読まれる傾向にあった。宮地自身、単行本『煤煙の臭ひ』（天祐社、大正八年）刊行の際に、収録した作品は「実は私の半生の労働生活の記録である」(9)と述べている。この言葉の通り『煤煙の臭ひ』には宮地の実体験が多分に活かされているのだろう。

しかし、丸田と嘉吉という社会主義に関心を持つ二人の労働者がそれぞれに直面する苦悩や、彼らがその苦悩とどのように向き合っているかなど、宮地の〈体験〉として切り捨てることの出来ない問題も本作には存在している。本論はそれらの問題の中から特に丸田の〈放浪〉について着目し、当時の労働者事情や「簡閲点呼」といった制度を踏まえながら『煤煙の臭ひ』の考察を試みたい。

二、『煤煙の臭ひ』の時代

『煤煙の臭ひ』は大正七年に発表された作品であるが、堀切利高は本作の時期について「（稿者注、宮地が）一職工として海軍工廠に勤めていた呉時代の第二期の生活」(10)を描いたものだと述べている。これについて補足を加えると、宮地は明治三三年から大正二年までの間に、呉と東京を三度に渡って行き来している(11)。

堀切はこの三度の往来を三つに分け、明治三三年から明治三五年までを〈呉時代の第一期〉、明治三八年から明治四一年までを〈呉時代の第二期〉、明治四五年から大正二年までを〈呉時代の第三期〉として区分している。

堀切の論に従うならば『煤煙の臭ひ』の時期は明治三八年から四一年の間であると、ひとまずは想定できるだろう。だが、堀切が何を論拠にこの時期を推定しているのかは不明確なため、本論でも改めて確認しておきたい。

まず、丸田の兄貴分である嘉吉が吸っている「バツト」という煙草が一つの手掛かりとなる。この煙草の正式名称は「ゴールデンバット」であり、『煙草販賣統計』(12)によると明治三九年九月に販売開始になっている。このことから作品世界の時期は明治三九年九月以降であると想定出来るだろう。

次に、丸田が三年前に「戦地」へやられ、二年前に「此の土地」へやって来たという記述である。『煤煙の臭ひ』が発表された大正七年以前で、かつ明治三九年前後に終結した戦争だと考えると、丸田が出征したのは日露戦争であると考えられる。このことから、『煤煙の臭ひ』は日露戦争終結から約二年後の明治四〇年前後を舞台にしていると推測できるのだ。

さて、丸田は戦地から引き揚げた後「造船所」で働いているが、日露戦争前後の国内の造船業の様子を確認しておきたい。

長岡新吉は日露戦争最中の国内景気について、「明治三八年六月頃になると戦局の有利な進展によって株式市場は活況を呈し一般的に好況への様相を呈しはじめ」た(13)と述べている。造船業も同様で、この時期の労働者数と賃金の上昇を確認できる。たとえば『三菱長崎造船所史（続編）』(14)によると、明治三八年の一二月末には七三五一人であった労働者在籍数が、三九年には九三四一人、四〇年には一〇一四一人と一貫して増大している。また平均月収は、明治三八年に一六・四九円、三九年に一五・二八円、明治四〇年に一七・六三円と、やや変動はあるものの上向きであると言って差し支えないだろう。（ただし賃金は物価指数にも左右されるため留意が必要である）

だが、日露戦争による好況は、講和条約によって無償金が確定すると明治四〇年頃に停滞を見せ始める。一般的に「明治四〇年恐慌」と呼ばれるものであり、造船業もその例外ではない。先程と同じく『三菱長崎造船所史（続編）』(15)を参照しながら、明治四〇年以降の労働者数・平均賃金を概観してみたい。

明治四〇年の労働者在籍数が一〇一四一人であったのに対して、四一年には八八四〇人、四二年には六一七一人と大幅に減少している。また、平均月収も四〇年には一七・六三円であったのが、四一年には一四・八四円に減少。四二年は一

六・九四円と、数値だけ見ればやや回復の兆しが見える。

以上のように、『煤煙の臭ひ』は日露戦争後の不況期を背景とした作品なのである。仕事を休みがちの丸田に向かって同僚の老職工が、

「それが好いぜ。休みが多い奴はどしどし解雇してる時節だからなあ、今解雇されちやお前だつて楽ぢやあんめえ。」

と忠告する場面があるが、この言葉がまさに日露戦争後の不況にあおられる労働者の姿を示している。「渡り者」の労働者である丸田が次の土地に放浪することを望みながらも、なかなか「此の土地」から離れる決心をつけられないのは、今の職を失えば再び「失職の憂目」を味わうことが明らかだからである。

次に、こうした「明治四〇年恐慌」前後の「渡り者」労働者がどのような存在であったかについての確認を行いたい。中心人物の丸田は「渡り者」労働者として設定されている。「渡り者」とは全国各地を転々としながら次々に職場を変える労働者のことだ。明治三四年に農商務省商工局工務課工場調査掛が提出した『職工事情』(16)には、特に日露戦争以前の好況期にこうした労働者が数多く存在したと述べられている。以下は、造船業を含む鉄工事業に関する「渡り者」の記述である。

鉄工の移動は、かの紡績、織物または生糸職工に比しやや少なきも、これを欧米の鉄工に比し甚だ多きが如し。殊に事業繁忙、職工の欠乏を告ぐる場合には単に僅少の給料の差異により軽々しく他工場に行き、事業の閑なるに及びてまた大工場に移る等、工場の間を転々するもの多く、また当初身を本業に投ずるときよりこれを以て終生の業となす決心のもの少なく、中途倦厭し、もしくは多少の貯蓄をなし、廃業するもの少なからず。

このように、『職工事情』は鉄工事業に従事する労働者の勤続年数が短いことから、鉄工事業における労働者間の移動が盛んだったことを指摘している。鉄工事業の労働者達は給料や待遇面の良い工場から求人が掛かると、今の工場を辞めてすぐそちらに移り、そこでの仕事がなくなると別の工場へと移動していたようだ。

明治三五年から石川造船所で職工をしていた高山治郎市も、当時を振り返ってこのように語っている(17)。

私も、その後何一〇回と石川島を出たり入ったりしました。昔は、今日まで石川島で働いたとしても、「おい、どうだい、一寸手間を多く出すから来ないか」というと、

明日からそっちへ行って仕事をし、なくなるとまた石川島へ来て、（中略）そうしているうちに、また他所から「少し手間を余計出すから来ないか」といってくる。

以上の高山の言葉からは、工場間で労働者の争奪が行われていたことも読み取れる。実際、日清戦争後には航海奨励法・造船奨励法[18]が施行され、造船業は活況を呈し労働者の需要も高かった。

また、徳永重良[19]は、この時期の労働者の移動率が高かった理由について、二つの要因を示している。まず一つ目は、当時は社会保険や福利厚生といった制度がなく、勤続年数が労働者にとって有利なものとならなかった点である。前に挙げた高山次郎市も、当時は職場を辞めても「退職手当があるわけじゃなし」というように語っている。

二つ目は、工場を移動することによって経験を積むことが出来、それに応じて賃金の増大を期待できた点である。例として、『煤煙の臭ひ』の作者である宮地嘉六の経歴[20]を参照してみたい。宮地は明治三一年（宮地・一五歳）に佐世保海軍造船廠製罐工場に入るが、その当時の日給は四五銭であった。それが明治三四年（一八歳）に呉海軍工廠の臨時雇職工となると日給七〇銭となる。翌年（一九歳）上京して富岡鉄工場では日給八〇銭になり、石川造船所に移るとやや落ちるが日給六〇銭を受けている。そして明治三七年（二一歳）のとき再び呉海軍工廠へ戻ると、そこでは特別職工として雇われて日給一円になるのである。もちろん物価の変動もあるので一概に上昇しているとは言えないが、このときの日給については宮地も「まだ職工で一円といふ日給を取る者はさう多くはなかったので」[21]と、他の職人に比べても高級取りであったと語っている。第一次世界大戦以前までは単能工ではなく万能工が必要とされていたこともあって、労働者は各地で経験と技術を磨くほど賃金率の向上を期待できたのだ。『煤煙の臭ひ』の丸田もこのような働き方――、全国各地の工場を転々と渡り歩き、そこでの仕事に飽きたり他工場から求人がかかったりすればすぐに移動する、という働き方をしていたと考えられる。

しかし、自分の都合で好き勝手に移動する「渡り者」は工場の経営側にとっては厄介な存在であったに違いない。三菱長崎造船所の報告書[22]にも「幸ニ三菱造船所ハ（中略）幾分斯ル者（稿者注・渡リ者）少キモ」とあるように、経営側にとって「渡り者」労働者は重要な労働力である一方、経営主の事情に関係なく気儘に立ち去ってしまう迷惑な存在でもあったのだ。

また、経営者が「渡り者」を厄介視していたのは、「渡り者」の身元の不確かさにもあっただろう。例えば宮地嘉六は、最初に呉海軍造船廠に志願したとき「西依徳次郎」という偽名を用いている[23]。あるいは、宮嶋資夫の『坑夫』の石井

は炭坑を渡り歩く労働者であるが、彼は野洲鉱山での暴動の中心となった過去がある。「渡り者」は過去に何か問題を起こしていても、別の場所に移動することでその経歴や身分を隠匿し易かったのだ。『煤煙の臭ひ』のなかで、資本家の義兄が「渡り者てぇ奴あ始末におえません」と語るのは、「渡り者」が社会的に信用されにくい存在であったからだろう。

だが、こうした「渡り者」の数は明治四〇年の恐慌以降減少していく。一例として『労働者取扱方ニ関スル調査報告書』の「職工離職率の趨勢」(24)を参照してみたい。明治三九年の離職率は四四％であり、明治四〇年と四一年はともに五二％であった。しかし、この三年間は離職人数だけでなく雇い入れ人数も同じように多い。そのため、この三年間で行われた労働者の移動は、自主的な移動、つまり「渡り者」の出入りであることが分かる。

しかし、明治四二年は雇い入れ人員に対して解雇人員が圧倒的に多く、離職率も六九％と高い。そのため、これは労働者の自主的な移動ではなく企業側からの人員削減だと考えられるだろう。前述したとおり、日露戦争以前に「渡り者」が多く存在したのは労働者の需要が多かったからであった。労働者の受け入れ口が広く、他の工場に移ることによって賃金を高めることが出来たので、労働者達は工場間を移動したのである。だが、明治四〇年の恐慌以降、仕事が無くなり労働者の需要が減ると、労働者達は現在の工場にしがみつくようになる。明治四二年に六九％だった離職率は四三年に二六％となり、それ以降は二〇％台で推移していく。この数字は不況による「渡り者」の減少を如実に示しているだろう。

『煤煙の臭ひ』の冒頭で、「夫婦づれ」或いは「独身者らしい脛一本」の労働者が「青服の着流しで、手荷物を振分けに背負つて」船から降り立ってくる。彼らはおそらく不況のために職を失った労働者であり、二年前の丸田と同じように「鉄とエンヂンのどよめき渡る工場」を目指してやって来た者だと思われる。だが、彼らの様子を見た丸田が「此の土地だつて仕事にあり附くまでは容易ぢやない」と思うように、巨大な「造船場」ですら仕事がない状況なのだ。明治三〇年代においては、自らの熟練した技術を武器に工場から工場へと移動した「渡り者」労働者は、恐慌以降職を求めて全国を彷徨い歩く労働者へと変わっていったのである。

三、〈消耗品〉としての「労働者」

これまで、明治三〇年代の「渡り者」労働者は少しでも良い待遇や仕事を求めて全国各地を移動したと説明した。だが勘違いしてはいけないのは、「労働力が増大し（中略）職工争奪がはげしくなった」(25)この時期にあっても、資本家達は労働者のために労働環境の改善を図らなかったということだ。

明治二〇年代後半頃から労働者たちは「組合」を結成し、

待遇改善を求めて「同盟罷業」などを行うが、「日本鉄道の労働争議」などの一部を除いて、それらの運動はほとんど失敗に終わってしまう(26)。さらに明治三三年には「治安警察法」が制定され、労働組合運動自体が困難になってしまう。

好況期においてもそのような労働環境であったのだから、恐慌下にあってはさらに劣悪になっていったと考えられる。『煤煙の臭ひ』には、造船業に携わる労働者が死と隣り合わせの現場で働いている姿が克明に描かれている。次の引用は、二人の労働者が「起重機」に押し潰されて死んだ現場を、丸田と嘉吉が見て通る場面である。

「此の枕木の血を見な。」と嘉吉は指さした。丸田は息が詰まるやうで返事が出来なかつた。其のあたりの揚荷の上には十人ばかりの人足が腰をかけて、昨日自分達の仲間を失ひながら案外別に悲しげな様子もなく煙草を吹かせてゐた。そして、いかほど死んでも代りに事欠くことはないと言ひたげにあたりの光景は事もなげにいつもの通りだつた。凡ての惨事は人間等の愚かさと不注意と無自覚とに帰せしめてゐるかのやうに起重機は傲然と突つ立つてゐた。丸田は急いで通り過ぎた。

仲間が死んでいながら人足たちが「案外別に悲しげな様子」もないのは、このような悲惨な事故が日常茶飯事であることを表しているだろう。そしてそのような事故が起こるのは、あくまで労働者の「愚かさと不注意と無自覚」という自己責任として片づけられるのだ。そして、本来「起重機」とは労働者に使われる機械であるが、この場面ではあたかも巨大な「起重機」の立場が労働者よりも上で、労働者達が「起重機」の〈部品〉であるかのように描かれている。二人の人足を押し潰しながら「傲然と突つ立つて」いるこの「起重機」は、単なる機械ではなく、労働者を虐使する「資本家」の象徴としても読めるだろう。

さらに『煤煙の臭ひ』には、死には至らずとも労働によって肉体を欠損した労働者も登場する。「猫背で胴体の馬鹿に短い、そして脚ばかりがひよろ長い、腕の片一方ない番人の爺さん」は若い頃シャフトに撒きつけられて片腕を失い、三十年以上も暗い消耗品倉庫の番人を任されている。この片腕を失った老人が「消耗品倉庫」の番人であることは意味深い。人足たちが巨大な「起重機」の〈部品〉であるように、資本家にとって労働者は「いかほど死んでも代りに事欠くことはない」「消耗品」に過ぎないのだ。恐慌以降はこのように労働者を使い捨てる傾向がますます強まっていったと思われる。

そして丸田は、自分達労働者が資本家たちにとって「消耗品」のような存在であるということに自覚的である。このことは、丸田が社会主義に関する本を愛読しており、それを嘉吉に貸して、二人で「現時の自由労働制度」について議論を

交わしていることからも窺える。

「奴隷関係と自由契約関係とあり、現時の自由労働制度と雖も実は仮定に過ぎず。労働者の自由は死活問題を伴ひ、資本家の自由は単なる損益問題なり。（中略）此処に於て餓死を欲せざる以上労働者は自ら譲歩に譲歩を以てするの他なく遂に如何なる虐使にも服せざるを得ず。此の意味に於て今日の自由契約関係と雖も実は依然として奴隷関係の旧態を存せるものと言ふを得べし。」

「これだ。まつたくこれに違えねえや。」と嘉吉は読み終つて昂然となつた。

「さうだ。俺達の自由てえのは名目だあ……。」

このように、丸田は「現時の自由労働制度」が「自由契約関係」と言いながら、その実態は「奴隷関係」であるという意識を持っている。だからこそ丸田は恐慌下にも関わらず、職を捨てて「此の土地」を去ることを考えてしまうのだ。丸田は放浪に駆られたとき「ステーションや波止場」へ行って「遠い国々」に思いを馳せる。ここで丸田が夢想する「遠い国々」とは、「現時の自由労働制度」のような〈名目上〉の「自由」ではなく、本物の「自由」がある「自由な明るい国」のことだろう。

前に確認した通り、この時期の「渡り者」労働者は、賃金の向上と待遇改善を求めて工場から工場へと移動した。もちろん丸田も一面にはそのようなものを求めて放浪したのだろう。だが、丸田の放浪はそうした側面だけには留まらない。丸田の放浪とは、労働者にとって真に「自由」な場所を求める旅でもあるのだ。

四、「簡閲点呼」からの忌避

丸田を放浪に駆り立てるものが「労働制度」への不満とそれからの逃避であることは、森山重雄[27]も指摘する通りである。

彼（稿者注・丸田）は渡り者の労働者として、たえず他の土地に心惹かれている。労働の苦しさが彼を駆り立て、「もつと良い所へいけないのだろうか」という思いが、倦みがちな彼の心を旅へいざなう。

だが、丸田の放浪願望の背景には、労働の問題だけでなく「簡閲点呼」に対する忌避があることも指摘しておきたい。宮地嘉六の労働小説の主要なモチーフである放浪については、これまでの研究において〈労働〉という側面ばかりに焦点が当てられてきたように思う。だが『煤煙の臭ひ』では、丸田が「簡閲点呼不参者」であるということも見逃せないだ

ろう。

「簡閲点呼」について論じる前に、まず丸田の軍人としての立ち位置を確認しておきたい。丸田は「陸軍輜重輸卒」所属の兵隊であるが、すでに「三年間の軍隊生活」を送ったとあるので、物語世界の現時点においては「予備役」(28)であると考えられる。「予備役」とは「現役」を終えた者で、平時においてはほとんど召集されることはないが、有事の召集には応じる義務があった。

黒田農編纂『在郷軍人必携簡閲点呼』(29)によると、「簡閲点呼」とは「予備役」をはじめとする在郷軍人を定期的に集合させ、体力検査や教導を行い、軍人としての心構えを指導するものであった。「簡閲点呼」は基本的に本籍地において、一年から二年ごとに実施された。だが、「渡り者」の丸田のように一時的に居住地を転々とする者は、手続きを行えばその地で点呼を受けることも出来た。そして当然のことながら、「簡閲点呼」は兵役に服する者の義務であった。これに参加しない者には、それが「疾病若は事故に由る」ものであっても、罰金や拘留といった罰則が科せられた。

このような厳格な罰則があるにもかかわらず、『煤煙の臭ひ』の丸田はその手続きを怠っていたのである。憲兵部隊に呼び出しを受けた丸田は、点呼手続きを怠った理由について、「此の土地を立ち去る考へ」があったために「余儀なく見合わせた」のだと述べる。もちろん、これは正当な理由ではなく単なる言い訳に過ぎないだろう。もし丸田が本当に「余儀なく」手続きを見合わせたのであれば、「此の土地を立ち去る考へ」を保留にした時点で「簡閲点呼参会願」の手続きをした筈である。それをしなかったのは丸田に「簡閲点呼」に参加する気がなく、また放浪することで行方をくらまし「簡閲点呼」を忌避したかったからだと推測できる。

なぜなら「簡閲点呼」に参加するということは、軍にかかわることだからだ。『煤煙の臭ひ』の本文からは、丸田が軍隊生活にかなりの苦痛を感じていたことが読み取れる。

> ともあれ其の時だけは真実此の土地に定住を誓つたのであつた。三年間の軍隊生活の堪へがたい忍苦、実戦に参加し損ねて命拾ひをして、やつと我が身一つが自分の物になつたといふ悦びは、世の中の一切を無批判に肯定させた。

このように、丸田は「三年間の軍隊生活」を「堪えがたい忍苦」として捉えている。丸田には国を護ったという意識もなく、大国「露西亜」に勝利したという意識もない。彼は戦地から生きて還れたことにただ「悦び」を見出しているのだ。三年間の軍隊生活を送った丸田はもう「現役兵」ではないが、有事が起これば再び召集され、そのときには今度こそ「実戦に参加」させられて命を失う可能性もある。

また、丸田が「輜重輸卒」という地位の低い兵士であることも、彼が軍との接触を避けようとする一つの要因であろう。「輜重輸卒」とは主に補充を担う後方支援の兵士である。当時、彼らはかなり軽視されていた存在だったということを、例えば毛利八十太郎の『洋行帰りの輜重輸卒』(30)などに見ることができる。

輜重輸卒と言へば薄汚い軍服を纏ふて駄馬を曳いて歩く何となく劣等な、有らずもがなの者の様に考へて居る人が多い。甚しきは「輜重輸卒が人間ならば裏の枯れ木に花が咲く」など謡つて平然たる者が有る、同時に謡はれる方も何うせ輸卒だからと自らを卑下して満足してる者もある。

当時の徴兵制度では、男子は適齢期になると身体検査などを受けさせられ甲乙丙に分けられた。そのなかでも甲種に合格し、戦線で活躍できる兵士に選ばれることが〈栄誉〉だった一方で、物資の輸送担当で昇進も出来ない「輜重輸卒」に配属されることは〈恥〉であったのだ。だから丸田は想い人であるお小夜に「何兵でしたの。」と訊かれても「輜重輸卒」だと答えることが出来ないのだ。

「どうもさうらしいと私も思ひましたよ。何兵でした。屹度軍曹か何かでせう。」

「まあ、人が悪い。丸田さん、あんな豚々した軍曹があつたらそれこそ大変ですわ。あの人は輸卒ですのよ。それも補充輸卒のペイペイですの、ほゝゝゝ厭になつてしまひますわ妾……。」と彼女は笑つた。聞いてゐる輜重輸卒も耳の根つこまで赤くなるほどたまらなかつた。

「此の人は俺が輸卒だといふことを知つてるのか知ら……。」

この場面からは、お小夜も世の人達と同様に「輜重輸卒」という存在を軽視していることが分かる。ここはお小夜が夫について話す場面であるので、身内による謙遜とも捉えられるが、少なくとも彼女は「輜重輸卒」の夫のことを誇りには思っていないだろう。

丸田はお小夜から「輜重輸卒」の話が持ち出されるまで、お小夜の夫に対してやや優越感を抱いていた。お小夜の夫は丸田よりも美男であったが、鼻に大きなイボがあり、またその鼻をけたたましく鳴らす妙な癖があった。その夫を紹介するお小夜も、羞恥で「心持顔を赤らめてゐるやうに」丸田には見えた。また、お小夜の母達もこの夫に対して「軽い侮蔑」を持っているようであった。そのように風采の上がらない夫であるから、丸田は夫と対面してもお小夜への想いを捨てきることが出来なかった。丸田はお小夜の夫が「自分より

は数等立ち優つた男」であったなら、お小夜への想いを「微塵に粉砕」できると考えていた。だが実際の夫は「善良な変人」でしかなく、妻の家族からも蔑ろにされていたため、丸田は想いを断ち切るどころか既に姦夫であるかのような妄想まで抱いてしまうのだ。

しかし、「輜重輸卒」の話が持ち出された時点で、丸田が夫に対して抱いていた優越感は反転して〈恥〉になってしまう。丸田はお小夜の夫に対して「彼女の亭主としては物足らぬ感じ」を覚えていたが、丸田もまたお小夜に「お恥ずかしい兵隊」と言われる「輜重輸卒」なのだ。

丸田は徴兵によって「三年間の軍隊生活」という「堪へ難い忍苦」を味わわされただけではなく、「輜重輸卒」という「お恥ずかしい兵隊」の烙印をも押しつけられている。丸田にとって軍とは、自分に苦痛を与えるものでしかないのである。

以上のようにして見ると、丸田は「寄留地簡閲点呼参会願」を「余儀なく」見合わせたのではなく、〈放浪〉のどさくさに紛れて故意に手続きを怠ったのだと考えられるだろう。これまで見逃されがちではあったが、丸田の放浪の背景には間違いなく「簡閲点呼」――軍からの逃避も存在するのだ。

五、〈反抗〉しない丸田

ここまで、丸田の放浪には二つの側面があることを論じた。一つ目は自分たちが「奴隷」のように扱われる「現時の自由労働制度」を倦厭して。二つ目は軍とかかわることを忌避して。だが丸田はそれらに対して〈反抗〉をしようとはしない。放浪はあくまで労働や軍との関わりからの〈逃避〉なのである。

『煤煙の臭ひ』の冒頭では、その日の労働をサボった丸田が、労働時間の終了を告げる「造船所」の「喉太い汽笛」の音を波止場で聞く。その「汽笛」の音を聞く丸田の表情に、語り手は「反抗の色」を読み取る。

> 彼の顔面には此の一瞬間弱い心の悶えと怖れとがありありと現れて見えた。それは其の汽笛の威嚇に打ち克たうとする反抗の色であつた。然し其の汽笛の声は彼等労働者が永遠に背くことの出来ぬものだつた。それを思うと彼は強ひても自分の意思を消極的にし、そして一生涯此の土地に身を縛り付ける為には妻子といふ重荷が必要であること、それが結局得策であることなどを考へ至らねばならなかつた。

ここでの「汽笛」は労働者を酷使し管理する資本家の象徴であるとともに、その背後にある「国家」をも意味していると言えるだろう。だが、それは結局〈反抗〉とはならず、丸田は「妻子といふ重荷」を作ることでその反抗心を抑え込も

うとするのだ。
丸田が労働者達を「消耗品」のように扱う「資本家」たちに反発心を覚えながらも、それが〈反抗〉に至らないのは他の箇所にも表れている。
例えば、丸田が嘉吉と共に社会主義の本を読み交わし、議論を交わす場面である。丸田達は現在の労働制度を「奴隷関係」と捉える本に強い共感を示しており、自分たちが資本家によって不当に扱われていることを強く意識している。だが、丸田は労働者仲間二人が「起重機」に押し潰されて死んだ現場を目撃しても、まるで目を逸らすように「急いで通り過ぎ」てしまうのだ。

「凡ての惨事は人間等の愚かさと不注意と無自覚とに帰せしめてゐるかのやうに起重機は傲然と突つ立つてゐた。丸田は急いで通り過ぎた。

丸田はたしかに労使問題に強い関心を持っており、自分たちを酷使する資本家に対し不満や反発心を抱いている。だが、丸田はそのような気持ちを抱きながらも、例えば「労働争議」を引き起こすなどして資本家に楯突いたりすることはない。資本家に「奴隷」のように扱われていると自覚しながらも、悲惨な事故現場から「急いで通り過ぎ」てしまうという点で、丸田は「仲間を失ひながら案外別に悲しげな様子」もない労働者たちと大差ないのだ。
このように、反発心を持ちながらも〈反抗〉に至らない丸田の態度は軍に対しても同様である。「簡閲点呼」から逃れるために点呼参会願の手続きを怠った丸田は、憲兵部隊から呼び出しを受ける。憲兵隊長から強く叱責される丸田は、「男らしい」毅然とした態度で立ち向かおうとするのだが、結局彼は弱々しく「ひた詫びにお詫び」をしてしまうのである。

「此の度は何とも、はい……実は此の土地を立ち去る考へでもございましたので……はい……それで寄留の手続も……はい……はい……余儀なく見合わせましたやうなわけでして……はい……今度のところはどうか隊長殿のお情けに……はい……。」と彼は事情を述べてひた詫びにお詫びをした。

以上のように、丸田は「労働制度」や「国家」に対して不満や反発を覚えながらも、それらに対する〈反抗〉には至らない。むしろ嫌々ながらもそれらに従ってしまう節すらある。丸田に出来る唯一の抵抗は、搾取する資本家や軍などがない「自由な明るい国」の「幻影」を追い求めて放浪したり、社会主義に関する本を読んで自分を慰めたりすることだけなのだ。

本論の最初に、宮地をはじめとする労働小説がマルクス主義的プロレタリア文学の作家達に評価されなかったことを指摘した。その一方で、例えば山川菊江は『職工物語』[31]の「序文」に以下のような言葉を寄せている。

それは後年の、いわゆるプロレタリア作家のある人々の中に見られるやうなひとりよがりのはでな英雄主義、高慢な排他主義などは薬にしたくも見られない、極めて素朴な、じみな、正真正銘の勤労者の生活記録であつたと覚えています。

この言葉とプロレタリア作家達の評価は表裏一体をなしていると言えるだろう。つまり、マルクス主義的プロレタリア作家は労働者による〈革命〉を求めたが、実際の労働者の殆どは社会に対して不満を抱えていても、それを〈反抗〉という行動に移すことはなかった。そのような意味で、『煤煙の臭ひ』の丸田は、山川の言う「正真正銘の勤労者」と言えるのかもしれない。

六、「自由な明るい国」

〈反抗〉しない丸田は、労働者が「奴隷」として扱われず、「徴兵」のような義務が存在しない「自由な明るい国」を夢想して放浪する。もちろん、どこに行ってもこのような「自由な明るい国」は存在しない。丸田もそのようなものが理想郷にすぎないと知っているからこそ、その国は「果て知れず遠い」場所にあると考えているのだ。

しかし、「国」という形ではないが、丸田の理想に近いものが体現された箇所が『煤煙の臭ひ』には存在する。丸田と同僚の嘉吉が、勤務の合間に「露助」の捕鯨船へ乗り込む場面である。

嘉吉はポツケツトから細長の紙函を二個取り出してやつた。露助はほくほくしながら受取つて直ぐ蓋を開けて見た。そして嬉しさうに叫んだ。それは花札と将棋の駒とであつた。アレキセイは嘉吉を何処かへ引つ張つて行つてしまつた。それから暫くしてから何か古新聞にくるまつた物を小脇に抱きながら嘉吉は戻つて来た。（中略）嘉吉は抱いて来た小脇の古新聞の包みを先づテーブルの上に置いて開き始めた。

「それ、ウオツカと乾葡萄だぜ、露助め素敵な物をくれよつた。（後略）」

「露助」の船で嘉吉は「花札と将棋の駒」を、ロシア人・アレキセイは「ウオツカと乾葡萄」を交換している。「花札と将棋の駒」を手にしたアレキセイは「嬉しさうに叫ん」でおり、嘉吉も「ウオツカと乾葡萄」を「素敵な物」と言って

いることから、この交換は非常に対等であり相互を幸福にするものだといえるだろう。

そしてこの対等な交換こそが、丸田や嘉吉の理想とする労働の「自由契約関係」ではないだろうか。本来、労働とは〈労働力〉と〈賃金〉の対等交換であり、その対等交換を条件にして資本家と労働者が契約を結ぶのが労働の「自由契約関係」だ。だが実際には労働者は〈賃金〉以上の〈労働力〉を搾取されており、資本家が労働者を「虐使」する「奴隷関係」の状態にあるのが現状だ。そのような意味で、お互いのものを対等に交換し合う嘉吉とアレキセイの関係は、労働の本来の形である「自由契約関係」を象徴していると言えるのではないだろうか。

また、嘉吉とアレキセイが日本人とロシア人であるということも意味深い。日本とロシアは数年前に日露戦争で敵対し合った関係であるが、労働者である嘉吉とアレキセイはそのような国家の事情とは関係なく個人的な友好関係を結んでいるのである。嘉吉の「露助」という言葉には、ロシア人に対する差別的な意識が見え隠れするものの、基本的に二人は対等に親しみ合っていると言えるだろう。

「露助」の船では価値の対等な交換が行われ、それから国家の事情とは無関係な個人の交友関係が築かれている。それは丸田の夢見る「自由な明るい国」の体現だと言えるだろう。しかしそれは船の上という限定された空間で行われた一瞬の体現に過ぎず、丸田の理想郷である「自由な明るい国」はやはり「果て知れず遠い」存在に過ぎないのである。

七、おわりに

本論では、現在ほとんど顧みられることのない作家である宮地嘉六の代表作『煤煙の臭ひ』を取り上げ、中心人物である丸田の放浪について考察を試みた。従来、丸田の放浪については、本作が労働文学の先駆として位置づけられていることもあって〈苦しい労働からの逃避〉として捉えられることが多かった。しかし、丸田が過去の軍隊生活に苦痛を感じていたことや「簡閲点呼」の参会手続きを怠っていたことを踏まえると、放浪の背景に軍からの逃避が存在することも見えてくるのである。

そして、本論では考察が及ばなかったが、丸田の兄貴分である嘉吉についても今後検討していく必要があるだろう。嘉吉は丸田の影響を受けて社会主義思想に関心を寄せる労働者である。これまで労働に追われて「新聞の拾ひ読み」程度の娯楽しか持たなかった嘉吉が、「本」によって社会主義思想に目覚めていく。こうした「本」と「労働者」の関わりは、宮地の労働小説の重要な特色だと言えるだろう。また、『煤煙の臭ひ』で描かれる人妻の「姦通」は、宮地の他の作品でも繰り返し描かれる要素である。これらの問題についてさら

に考察を進めながら、『煤煙の臭ひ』ひいては宮地嘉六の小説を再評価していくことが今後の課題である。

注

（1）宮地嘉六「回顧の一端」（『現代日本小説大系』河出書房、第三〇巻、昭和二七年六月）
「この雑誌（藤村注、『中外』）に私の創作を推薦して下さつた堺利彦先生こそは救ひの　親である。同誌の編集部内のことはよく知らなかつたが学芸欄は生田長江氏が担当してゐられたことを後で知つた。堺先生と生田氏とはその頃、親交があつたやうである。おかげで私の創作『免囚者の如く』をはじめとして第二作『煤煙の臭ひ』それから『河岸の強人』など掲載してもらへた。」
（2）「天佑社新刊広告」（『朝日新聞東京版』大正八年十月三〇日）
（3）国際革命作家同盟第二回会議、通称ハリコフ会議。昭和五年一一月六日から一五日まで開催された。
（4）松山敏「日本プロレタリア文学についての報告―その沿革、現勢、および将来」（『日本プロレタリア文学大系』第五巻、三一書房、昭和三〇年五月）
（5）小田切秀雄「解説」（『日本プロレタリア文学大系』第一巻、三一書房、昭和三〇年一月）
（6）森本修「宮地嘉六論序説」（『立命館文学』昭和三八年一〇月、「宮地嘉六年譜・著作目録」『宮地嘉六著作集』第六巻、慶友社、昭和六〇年二月）
（7）森山重雄「宮地嘉六論」（『文学』昭和四二年二月）
（8）堀切利高「後記　宮地嘉六　その出発」（『宮地嘉六著作集』第一巻、慶友社、昭和五九年一月）
（9）宮地嘉六「小説『煤煙の臭ひ』―十三歳から卅歳まで十七年間鉄工場に働いた私の生活記録―」（『読売新聞』大正八年一〇月）
（10）同・注８
（11）同・注６
（12）専売局販売部『煙草販賣統計』昭和一〇年
（13）長岡新吉「日露戦争後の恐慌と「不況の慢性化」の意義（一）」（『北海道大学経済學研究』昭和四四年一月）
（14）『三菱長崎造船所史（続編）』（長崎造船所庶務課、昭和二六年一一月）より「第三表・勤労関係推移状況」。
（15）同・注14
（16）犬丸義一・校訂『職工事情』中巻、岩波書店、平成一〇年一〇月
（17）小林謙一・山本潔「元『造機船工労組合』会長高山治郎市との面接記録―一九六一年二月二日（資料）」（『社会科学研究』昭和五七年八月）
（18）航海奨励法・造船奨励法ともに明治二九年一〇月一日施行。
（19）徳永重良「明治後期における造船工場の発展と労働者状

態」（『経済志林』昭和三九年四月）

（20）同・注6

（21）宮地嘉六「職工から身を起こして」（『文章倶楽部』大正九年九月）

（22）『労働者取扱方ニ関スル調査報告書』第一部第一巻、三菱本社庶務局調査課、大正三年

（23）宮地嘉六「旋盤職工時代―私の十七八九の頃―」（『文章倶楽部』昭和四年二月）

（24）『労働者取扱方ニ関スル調査報告書』第一部第一巻、三菱本社庶務局調査課、大正三年より「職工離職率の趨勢」

（25）飯田鼎『労働運動の展開と労使関係』御茶の水書房、平成九年六月

（26）同・注25

（27）同・注7

（28）加藤陽子『徴兵制と近代日本』吉川弘文館、平成八年一〇月によると、「予備役」とは「現役を終えた者が服する。充員召集・臨時召集・演習召集に応ずる義務がある。」また、明治三七年の改正「徴兵令」では現役三年、予備役四年（陸軍）であった。

（29）陸軍歩兵中尉・黒田農編纂『在郷軍人必携簡閲点呼』吉田書店、大正二年（近代デジタルライブラリー）

（30）毛利八十太郎『洋行帰りの輜重輸卒』泰山房、大正七年一〇月

「一、簡閲点呼とは在郷軍人を集合して之を点検検査し且必要の訓示をなすを言ふ」

（31）山川菊江「序文」（宮地嘉六『職工物語』中央労働学園、昭和二四年一一月）

（ふじむらあずみ／本学大学院博士前期課程）